



君がい、ない、夜



猫屋雑猫

君が居ない夜

限界というものがあるのなら、既に通り越していた。
生まれ持った丈夫な身体で、無理をして、無茶をして
けれど、やっと「甘える」ということ「我が侘」
そんな他愛のないことを13年目で覚えた君

本格的な闘病生活は半年だった。
何もいわず、ただただ痩せきった身体に
相変わらず大きな金の瞳を見開いて
私のことを見つめたまま……
そのまま、君は冷たく、硬くなって行った。
さようならも言わないまま
また会おうとも言えないまま
ただただ旅立っていく君を見送ることしか出来なかった。

暖かな日、もう一度
仲の良い雄猫3匹でベランダで遊ぼうと約束したのに
君は桜の花が散るのを待つように
静かに息をしなくなった。

半年、君のために過ごした部屋で眠るのが怖くて
君の居ない初めての夜を明かした。
もう、痛くない。
もう、苦しくない。
もう、歩けないと、立ち上がれないと嘆く君は居ない。
さようならは言えなかった。
おやすみ
おやすみ
13年間、傍に居てくれてありがとう。
君が嫌う涙は流さない。
どうか、安らかに眠って欲しい。

君がいない夜

<http://p.booklog.jp/book/69708>

著者：猫屋雑猫

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nekoyazathuneko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69708>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69708>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ